

C—17 明治30年代に着用された一大礼服の研究
(第4報)

—Open-Leg Drawers について—

米沢女短大 徳永 幾久

1. 上杉藩最後の藩主で伯爵，元老院，貴族院議員である茂憲公の夫人兼子氏が明治35年御年賀の御参内の折着用された大礼服一式（下着も含む）が昨年発見されたので調査の機会を得た。当時は皇室中心の国威の高揚と欧化政策に心した時であり西欧では服飾造形技術が進歩し縫製裁断技術が完成期に入ったといわれる時なのでこの出所の明らかである残存服飾の研究は当時の服飾文化への意識や内容を知る上で貴重であり日本の洋裁縫製史にとっても意義ある事と思われる。昨年第13回家政学会東北大会において第1報～第3報で上杉大礼服全般の概要並びに構成縫製の報告を行なったがひきつづき資料の各々について追究を試み今回は下着の中の Open-leg drawers を主として報告したい。

2. 上杉年譜，上杉鶴鳴館資料，実物復元調査，昭憲皇太后御服と思われる大礼服と同蔵の Open-leg drawers との比較，JANET ARNOLD 及びNANCY BRADFIELD の資料参照。

3. Open-leg drawers は西欧では C. 1850～1900 年に使用され18世紀独特のものである。

上杉家のは後紐結びで C. 1870 年の形態と類似するが裁型は前後同形で後重ねの股引式で日本的構成である。着装順序も西欧と異にし西欧の機能性合理性はこの下着からは見出せない。ここで精巧なる大礼服と未消化のまま存在している下着とのアンバランスは当時の日本の洋

增能七技術七知才七貴道七資料七考九。